

平成30年度版高等学校『美術2』

編集の趣旨と特色

38光村 美II 303 内容解説資料



- 全てのページに、物語。
- 『美術1』と『美術2』—— 思考・表現の深化
- 拡張する教科書 —— 『美術2』のAR機能について
- 充実した教授資料

全てのページに、物語。

光村が目指したのは、「先生が語りたくなり、生徒が学びやすい」教科書。
 多様な作例をただ並べるのではなく、作品どうしの関係性を踏まえて厳選し、
 各作品の個性が引き立つ図書設計を行いました。
 美術の歴史や奥深さを感じられるよう、紙面には多くの「物語」を織り込んでいます。
 そして、各題材にそうした物語の鍵となる作品が配置されています。
 ここでは、その一部を4コマ漫画で紹介いたしましょう。



現代美術のゴッドファーザー



P.22-23 「身近な材料でつくる」

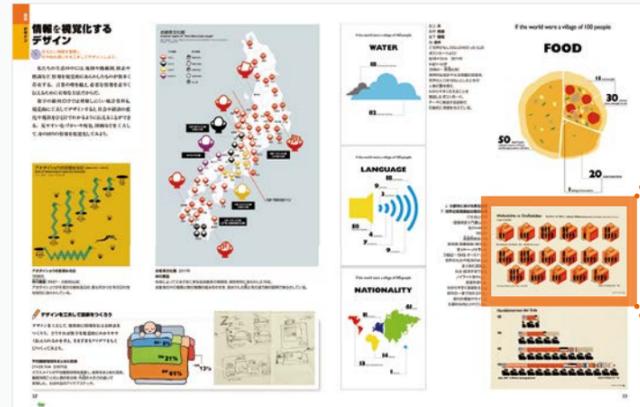
それじゃあ、
 ある意味このページの作品は
 みんな「泉」の子孫ってこと
 になるのかしら！



マルセル・デュシャン「泉」



小さな図像に大きな理想



P.32-33 「情報を視覚化するデザイン」

オットー・ノイラート 「大都市における居住密度」

「この世界について誰もが理解しやすいものをつくろう。」

オットー・ノイラート

私たちが生まれたのは第二次大戦前、識字率が今よりずっと低かった頃ね。作者は大きな理想をもった男だったわ。

このプロジェクトの背景にあったのは映画や雑誌など、視覚的なメディアが急速に広まりつつあった時代の社会状況。情報化社会の発展を見据えていたのね。

ノイラートと協力してデザインを手がけた中心人物は二人。彼らの共同作業で、情報伝達のための視覚言語は体系化されていたのよ。

TEAM PLAY
ゲルト・アルンツ マリー・ライデ「ミスター」
(のちにノイラートと結婚)

ピクトグラムやインフォグラフィックスなど情報を視覚化する現代のさまざまなデザインも、基本は大きく変わらない。

それだけ完成度が高かったってことね。

細かい数字なんかも絵で説明されると楽しいよね!

情報の授業でもグラフをついたりするけど、いろいろ工夫してみると発表が楽しくなるし、聞く人の理解がもっと深まるのかも…。美術の力って役立つね!

写真の歴史は冒険の歴史



P.44-45 「構図を工夫して撮る」

奈良原一高 「化石」

カメラが「冒険と行動の足」とは、奈良原一高もうまいこと言ったもんじゃ。

いやいや、カメラは足、足は重要とか、そういうことが言いたいのではないし、「冒険」という言葉が深いと思うんじゃ。

19世紀の後半には「旅行写真」というのが流行ってたな。

写真家たちが世界中旅して撮影した見知らぬ土地の写真を見るのが、当時の人々には楽しみだったのじゃ。

EGYPT JAPAN

20世紀には構成主義の写真がある。極端なアングルなど、異様な構図を特徴とする写真表現の動向で、あれは表現自体が冒険的で、ワクワクしたのう。

すごい見下して撮る
飛行機から撮る
すごい見上げて撮る

構図の工夫という点では、最近の若いのも頑張っているみたいじゃの。新しい表現を求める写真家たちの冒険に終わりはない。そういうことじゃの。

ADVENTURE

「見たことのないものが見たい」という人の気持ちは、きっと写真の表現と切り離せないものなんだろうな。

みんなカメラを持って冒険してきたんだね。自分も何かできるかな。挑戦してみよう!

『美術1』と『美術2』——思考・表現の深化

基礎・基本が中心の『美術1』に対し、『美術2』ではより発展的な内容を扱っています。機能的で見やすい紙面デザインと、多様な授業に対応するバランスのよさは引き継ぎつつ、系統立った題材構成にすることで、生徒が美術についての考えを深め、自分なりの表現を模索し、追求していくことができるように意図して編集しました。



表紙作品：田中一村「初夏の海に赤翡翠」



表紙作品：ゲルハルト・リヒター「ベティ」

表紙の作品について

孤高の画家。しばしばそう形容される田中一村は、画壇に近づかず、ほぼ独学で、僅かな支援者と自身のために絵を描いて暮らしました。50歳で奄美大島に単身移住してからも、どこに発表するでもない作品を多数残しています。『美術1』で目指したのは、基礎・基本に触れながらまずは美術を楽しみ、好きになってもらうこと。美しい自然と向き合い続けた一村の静かな情熱が、この教科書の内容には相応しく思えます。

一方、『美術2』の表紙は謎めいた女性の後ろ姿。現代の「世界最高峰」の画家ともよばれるゲルハルト・リヒターの作品です。絵画と写真の境界を曖昧にするリヒターの作風の背景には、長い美術の歴史の末にいま「絵画に何ができるのか、絵画になお何が許されるのか(*1)」という美学的な問いがあります。美術の本質についてより深く考え表現することを目指す『美術2』、その教科書内容を象徴する作品として「ベティ」を選びました。

*1『ゲルハルト・リヒター』(淡文社、2005年、p.28)



アトリエのゲルハルト・リヒター
©Anton Corbijn / Contour By Getty Images

表現の深まり

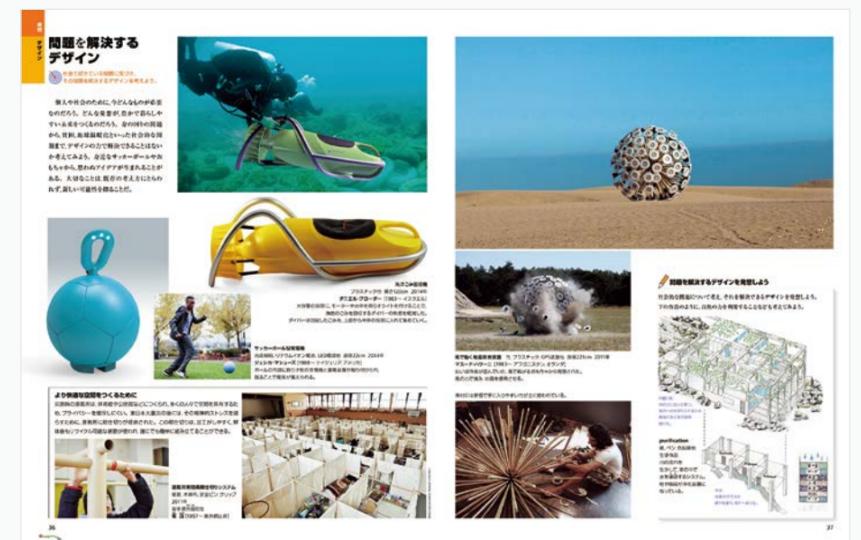
『美術1』は美術の楽しさを知ることにおいた題材構成。身近なものを気軽に描く題材に始まり、構図の工夫やトリックアートなど、さまざまな表現の切り口を紹介しています。『美術2』はより発展的な内容で、例えば静物画の題材では、対象を深く見つめ、緻密に、精神性まで描き出すような表現を取り上げています。



左 『美術1』P.8-9 身近なものを描く
右 『美術2』P.6-7 見えるものの向こうに

思考の深まり

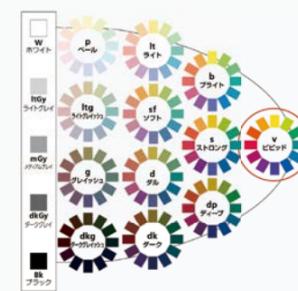
素材の特性や使用者の使い勝手を考慮することはデザインの基本。『美術1』は、そうした基本に即した題材構成になっています。『美術2』ではそれを踏まえ、社会で起きている問題を解決するためのデザインや、複数のデザインに統一感を与える題材など、より視野の広さと高度な思考力が求められる内容になっています。



左 『美術1』P.50-51 素材を生かすデザイン
右 『美術2』P.36-37 問題を解決するデザイン

資料ページ

『美術2』の資料ページでは、3つの発展的な知識や技能を扱っています。



色を深く知ろう
P.56-57
トーンの種類図や色の機能性、配色の工夫など、色彩に関する発展的な知識を掲載しています。



油絵の具で描く P.58-59
油絵画の用具の扱い方や制作手順を丁寧に解説しています。



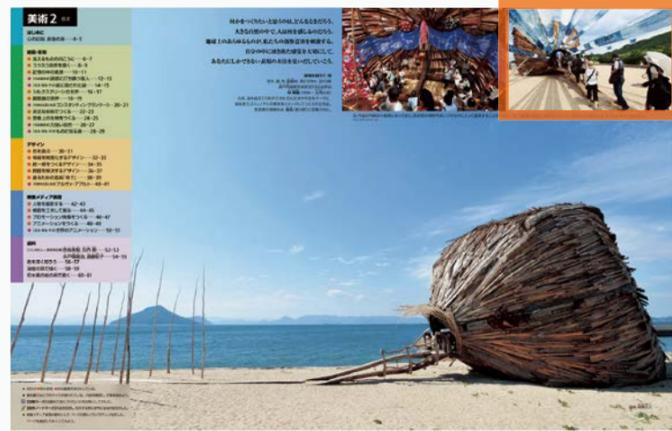
日本画の絵の具で描く P.60-61
制作手順や日本画特有の技法、顔料などについて解説しています。

拡張する教科書——『美術2』のAR機能について

光村図書の教科書には、AR(拡張現実)コンテンツと連動した作品があります。
教科書紙面の赤線で囲んだ部分にタブレットやスマートフォンをかざすと、
作品に関連した映像などのコンテンツが表示されます。鑑賞の授業などでご活用ください。

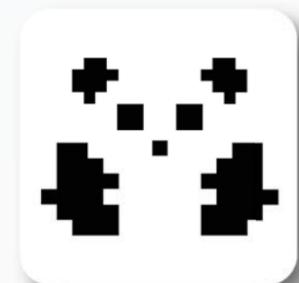
2017年4月現在、『美術2』では2つのコンテンツが利用可能です。

教科書P.2-3 林舜龍「国境を越えて・海」
瀬戸内国際芸術祭2013出品作品の記録映像。手持ちカメラで作品の内部に入っていき様子が撮影された、作品のスケールが体感できる映像です。



光村図書『美術2』ARの使用方法

タブレットまたはスマートフォンでアプリケーションストアを立ち上げ、「COCOAR」をインストールします。インストール完了後「COCOAR」を起動し、端末のカメラを教科書の該当箇所にかざすと、対応したARコンテンツが表示されます。

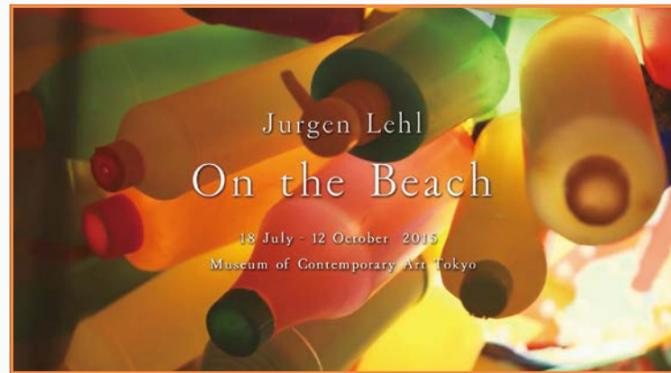


要注意

「COCOAR2」には対応していません。アプリケーションは「COCOAR2」ではなく、「COCOAR」をご使用下さい。



教科書P.62-63 ヨーガン・レール「浜辺のごみでつくったランプの展示風景」
東京都現代美術館での展示の様子を撮影した映像。幻想的な展示空間を体感しながら、スケッチや素材となった漂着物を見ることができます。



注意事項

※ARコンテンツは、2017年4月現在のものです。
※ARコンテンツは、教育機関における授業などで鑑賞することを目的に公開が許諾されており、著作権者に無断で複製、公衆送信(有線、無線の放送を含む)公開上映、改変などをすることは法律で禁止されています。
※お使いのタブレットやスマートフォンの機種、バージョン、設定などによっては、正常に動作しない場合がございます。

免責事項

※光村図書出版株式会社は、本コンテンツに関して一切動作保証をいたしません。
※光村図書出版株式会社は、本コンテンツに起因してご利用者に直接または間接的損害が生じて、いかなる責任も負わないものとし、一切の賠償などは行わないものとします。
※本コンテンツはご利用者への事前連絡なしに仕様を変更することがあります。それにより、ご利用者に直接または間接的損害が生じて、いかなる責任も負わないものとし、一切の賠償などは行わないものとします。
※光村図書出版株式会社は、本コンテンツの不具合などについて、修正する義務を負わないものとします。

『美術1』のARコンテンツ一覧

2017年4月現在、『美術1』では14のARコンテンツが利用可能です。教科書紙面の読み込み箇所やARアプリの使用方法など、詳細は光村図書の公式サイトにてご確認ください。



右のQRコードを読み込むと、光村図書の公式サイト「ARでアートを体感する」に簡単にアクセスすることができます。



《高精細図版》
伊藤若冲「樹花鳥獣図屏風(右隻・左隻)」[P.3]



《動画》
伊藤有孝「ハーバーテイル」[P.6]



《動画》
作家の手法「日本画家 森田りえ子」[P.7]



《高精細図版》
ヨハネス・フェルメール「絵画芸術の寓意」[P.14]



《動画》
作家の手法「彫刻家 舟越 桂」[P.31]



《高精細図版》
岩佐又兵衛「洛中洛外図屏風 舟木本(左隻)」[P.34]



《動画》
トーチカ「PiKA PiKAワークショップ in 広島」[P.59]



《動画》
クワクボリョウタ「10番目の感傷(点・線・面)」[P.60]



《動画》
生徒作品「ARTLiVE2012」[P.61]



《技法動画》
「カッターナイフで鉛筆を削る」[P.68]



《技法動画》
「水彩の技法 にじみ・ぼかし・吸い取り・かすれ」[P.70]



《資料動画》
色の資料「色の対比」[P.79]

色相の同化



黄の色味は、どのように見えますか？

《資料動画》
色の資料「色の同化」[P.79]



《パノラマ動画》
草間彌生「魂のおきどころ」[P.89]

充実した教授資料

『美術1 教授資料』がより見やすく、充実した内容になりました。

本冊には授業づくりのヒント集「今日から使える授業術」を新たに掲載したほか、作品や作家についての解説が手厚くなり、DVDには技法動画を収録しています。

『美術2 教授資料』にも豊富な資料を収録したCD、DVDが付属予定です。



教授資料セット概要

教授資料 本冊

- ・「今日から使える授業術」
- ・年間指導計画の作成のための資料
- ・掲載作家・作品についての解説
- ・教科書内容に対応した指導案
- ・作家や学芸員、批評家などによるコラム
- ・ARを授業で活用する方法について など

CD-ROM 各種資料編

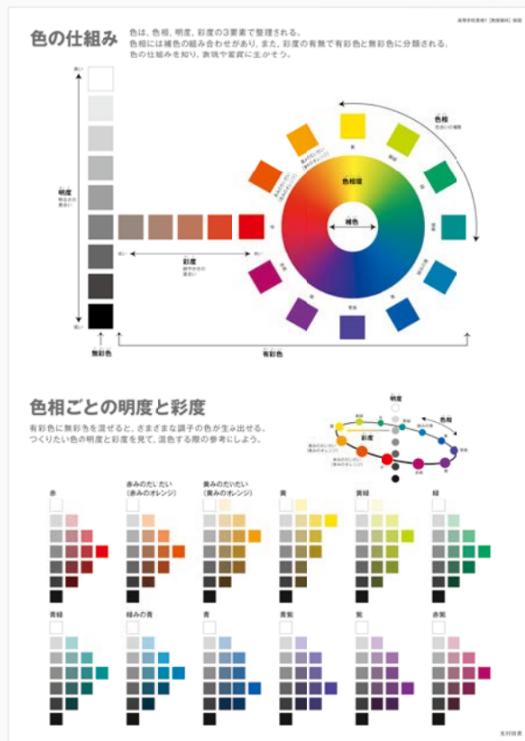
- ・デジタル鑑賞図版全3点
「樹花鳥獸図屏風」[絵画芸術の寓意]
「洛中洛外図屏風 舟木本」
- ・草間彌生パノラマ動画
- ・ワークシート全28種
- ・テスト問題全12回 など

DVD 映像資料編

- ・技法と用具の映像資料13本
- ・AR映像コンテンツ8本
- ・高校生映像作品5本

色彩掛図

- ・A1サイズ(841×541mm)
- ・PCCS(日本色研配色体系)準拠
- ・教科書P.78～80対応



教授資料本冊P.112掲載コラム

私・絵・他

O JUN

1956年東京都生まれ。画家。82年、東京藝術大学大学院美術研究科油画専攻修士課程修了。84～85年スペイン、90～94年ドイツに滞在。絵画制作を主に、パフォーマンスやライブドローイングなど「描く行為」をテーマとする活動を行う。14年より東京藝術大学美術学部絵画科教授。光村図書高等学校美術編集委員



「ミルコ」
紙、アクリルガッシュ、顔料、ガラス、鉄
171×120×5cm 2013年 撮影：宮島徑
©O JUN / Courtesy Mizuma Art Gallery

人が何かを始めたり、仕事に就いたりするきっかけはさまざま。その年齢も人によってまちまちだ。たまさか誰かや何ごとか出遭ったりして、例えばそこが美術への入口になっていたら、ささやかだが人知れず腹を括って“この世界”に入って来ることもある。転機というものは良くも悪くも蹟きだ。そういう私は、子供の頃からの絵好きが高じて絵描きになってしまった口だ。いや、小さな蹟きは私にもあった。小学3年生の時に図画工作の教科書に掲載されていたフィンセント・ファン・ゴッホの風景画を見て、一瞬、こういうことをする者に自分もなりたかった。今にして思えば、“こういう絵を描く者”でないのがおかしい。いずれにせよ、その後ほとんど迷いもせずこの世界に入って来て、美術大学に進んだ。当時は大学の中にも現代美術の風が吹き始め、意識の高い学生はその風を躰に受け世に漕ぎ出していった。私は彼らのやっていることに一向に合点がいらず、紙に水彩やクレヨンで人や風景をちまちま描いていたのだが、当の自分の筆触や色の出し方にはほとほと飽いていた。同時に、絵がなんとなく描きにくい時代であった。たかだか生まれてからの20余年で、自分の貯金をすっかり使い果たした感じに近かった。何かで埋めてこの身を充たすか、あるいは自分を何者かと「とっかえっこ」するかのどちらかだった。私は大学院修了と同時に美術にサヨナラをした。それからおよそ2年間、建築測量の仕事に就いて都内近郊の建設現場を転々として暮らした。絵を描かない2年間は未練もなく清々したものだった。労働の対価としてわずかではあったが報酬を得、家族と生活する単調さはむしろ心地よかった。それが或る朝、現場でいつものように仕事をしている時に猛烈に絵を描きたい気持ちが沸いてきた。その日の仕事終わりに事務所に行って、社長に勝手に詫言を詫言して辞めさせてもらった。ところが戻って来たものの、絵を描いたり描かなかったり、その日の雲行きや天気のようなあんばいで“降って湧く”のを待つだけの毎日だった。少し前まで“絵画は終わった、死んだ”といわれていたのがその反動からなのか、皆が“神話”とか“物語”とか言い出して、やたらゴテゴテベタと絵の具を盛り上げ大きな絵を描き出した。それも絵、ならばと見様見真似で自分も描いてはみたけれど、キャンヴァスも絵の具も、

振り切る筆跡も手(躰)にかえてくるものはどれも手応えを欠いた。モノも身ぶりも物語も、私には空虚だった。暇にあかせて棒ハンダを溶かしたり曲げたりして細工モノのようなオブジェをつくって遊んでいたときに、たまたまそれを壁に擦り付けたら鉛筆のような線が描けた。もっと太く強い線を描こうとして地金屋で錫と鉛をインゴットで買って来て、庭に穴を掘って放り込んでパーナーで溶かし固めた金属棒を両手で抱えて壁に描いたり、古着をたくさん重ね着して絵を描いたり、家の裏に穴を掘って首だけ出して埋まり、襟飾りのように金属棒を首の周りに並べて“庭を纏っている”とかわけのわからないことをしていた。ちょうどその頃、昭和天皇が倒れて、皇居前の広場に記帳所が置かれた。たまたま点けていたテレビニュースで、岩手から一人で記帳しに来たという女子中学生にテレビ局の記者が、なぜ来たのかと聞くと、その女子中学生はすかさず「自分のおじいちゃんが病気になる気がして早く治ってほしくて来ました」と答えた。その翌年にドイツに渡った。向こうで言葉や習慣の違いに困りながらも子供が生まれたり、新しい生活や知らない土地を旅したり、日々の瑣事に自分が日本を出た理由を考えることも忘れて暮らした。写真の現像を人から習い覚えたり、現地の画材屋で硬いクレヨンを見つけてそれで紙にアパートや建物、階段などをよく描いた。この頃に肝に銘じたことは、“考えた通りにじっくり描いたりしてはいけない、描かれた絵が思い通りに描けてはいけない。それなら描かない方が全然マシだ”，ということだった。或る着想を得て、そこから思考の道筋が伸びてゆき、折々に起こるであろう問いや事態を想定するようなメモ書きやブランドドローイングをどれほど重ねてもその果てにモノもコトも現れないことを何度も経験したからだ。思考のプロセスが明快になってゆくほど制作する手と気持ちは逆に萎えていくのだ。考えることとつくることは両輪ではない。考えることをする。絵を描くことをする。この二つを混ぜないで両隣りですること。二つの行為は互いに自動しつつどこかでいつか私を介して交信を始める。でも結構複雑な回路をつくったり、微妙なパルスを発し合ったりするのでその結果、私が身動き取れなくなったり、作品本体が耐えられなくなって壊れたりしたら、それが表現されたものの正直な姿であり運動の結果である。そんなことを5年に満たないドイツ暮らしと制作の日々から学んだと思う。それから帰国して今日まであつという間だった。写真はやめてしまったが、紙に水彩やクレヨンで描く日々は続いている。油絵も学生以来また描くようになった。学生の頃、好きな女の子と店に行って食べた料理はなぜかいつも不味かったのだが、それとよく似た後味の悪い油絵を描いている。かつて庭で溶かした鉛の棒は何本か溶かしてマスク型に鋳出した。40kg以上あるのだがそれをかぶってドローイングをしたりする。歳を取って体力も落ちて危ないので最近は減多にやらないが、秘かに次の機会を狙っている。言葉や声についての作文も書こうと思っている。それと今年になって絵のタイトルを付けなくした。とにかく、それぞれをするのだ。

私は、自らが起こした幾筋もの流れを治水の術もなく遊ばせて、次々に起こる事態にただ驚いたり、悲喜こもも身に沁みて覚えてきた。それでも合流させず細々とでもそれぞれ流し続けること。私と私の制作は、かようにささやかな個人史の枠を出ずにある。

平成30年度版『美術2』著作者

酒井忠康 [美術評論家・世田谷美術館館長]

伊藤有志 [アニメーション作家・東京藝術大学大学院教授]

上野行一 [元帝京科学大学教授]

O JUN [画家・東京藝術大学教授]

勝井三雄 [グラフィックデザイナー・武蔵野美術大学名誉教授]

黒木 健 [秋田県立西目高等学校教諭]

近藤誠一 [元文化庁長官]

鈴木雅之 [宮城県仙台二華中学校・高等学校教諭]

立川公子 [神奈川県立多摩高等学校教諭]

直江俊雄 [筑波大学教授]

中島千波 [日本画家・東京藝術大学名誉教授]

名取和幸 [色彩学研究者・一般財団法人日本色彩研究所]

野田弘志 [画家・広島市立大学名誉教授]

藤原えりみ [美術ジャーナリスト]

舟越 桂 [彫刻家・東京造形大学客員教授]

森田りえ子 [日本画家・京都市立芸術大学客員教授]

森山明子 [デザインジャーナリスト・武蔵野美術大学教授]

諸川春樹 [美術史家(西洋)・多摩美術大学教授]

安村敏信 [美術史家(日本)・元板橋区立美術館館長]



『美術1』 38光村 美Ⅰ 304



『美術3』 38光村 美Ⅲ 301

カラーユニバーサルデザインに関する校閲

市原恭代 [工学院大学准教授]

特別支援教育に関する校閲

佐島毅 [筑波大学准教授]

光村図書出版株式会社編集部

平成30年度版 高等学校用芸術科

『美術2』内容解説資料

光村図書出版株式会社

代表者 小泉茂

〒141-8675

東京都品川区上大崎2-19-9

電話番号 03-3493-2111(代表)

デザイン 遠藤幸(Asyl)

イラスト 深川優

撮影 後藤武浩

印刷 株式会社加藤文明社



『美術1 教授資料』

A4版・184頁／9,800円(+税)

ISBN978-4-89528-994-8



『美術3 教授資料』

A4版・96頁／4,200円(+税)

ISBN978-4-89528-843-9



この印刷物は環境に配慮した紙、
植物油インキを使用しています。

公式サイトでは4コマ漫画と
関連した素敵なインタビュー
映像が見られるよ！
チェックしなくっちゃ！

